沖縄県公文書館所蔵

■シンポジウム

# ウチナーンチュの移民 境界と移動

2022年には世界のウチナーンチュとの学術的、人的、文化的交流を促進すべく、名桜大学沖縄ディアスポラ研究センターが創設されました。また同年には新型コロナウイルス禍を経て第7回世界のウチナーンチュ大会が開催され、2024年1月には沖縄県による国内外ウチナーンチュ交流拠点の設置構想の発表もあるなど、世界のウチナーンチュの紐帯への関心は日々高まっています。日本国内でも有数の移民県として知られる沖縄は、世界各地の県系移民とその子孫との特別な繋がりを有しておりその繋がりは心情的なものに留まらず、学術的、人的、文化的、経済的交流を通して双方を高めあう可能性を秘めています。本シンポジウムでは、沖縄本島北部地域を中心とした中南米への出移民について、一国・一地域に限定されないその越境性と移動性に注目しつつ、故郷沖縄と出移民先との歴史的繋がりを再確認し、今後の紐帯の在り方について考える機会とします。

## プログラム

全体進行：坪井 祐司（名桜大学教授）

**開会挨拶** 13:30-13:35
嘉納 英明（名桜大学大学院研究科長）

**名桜大学沖縄ディアスポラ研究センターの設立について** 13:35-13:40
砂川 昌範（名桜大学学長・名桜大学沖縄ディアスポラ研究センター長）

**シンポジウムの趣旨説明** 13:40-13:45
坪井 祐司（名桜大学教授）

**基調講演** 13:45-14:35
「眉屋私記」と屋部
比嘉 久（名護博物館特任館長）
解説：上原 なつき（名桜大学准教授・名桜大学沖縄ディアスポラ研究センター研究員）

**休　憩** 14:35-14:45

**シンポジウム（各20分の報告）** 14:45-15:45
ファシリテーター：屋良 健一郎（名桜大学上級准教授）

キューバ沖縄移民による宗教実践の現在―日系人共同墓と慰霊行事の調査報告―
上原 なつき（名桜大学准教授・名桜大学沖縄ディアスポラ研究センター研究員）

越境するウチナーンチュ―具志川からブラジルへの出移民と多様な移動の経験―
長尾 直洋（名桜大学准教授・名桜大学沖縄ディアスポラ研究センター研究員）

ペルー沖縄移民のアルゼンチンとブラジル転住
我那覇 宗孝（名桜大学客員教授・名桜大学沖縄ディアスポラ研究センター研究員）

**パネルディスカッション** 15:45-16:15

**質疑応答・情報交換** 16:15-16:45

**総　括** 16:45-16:55
坪井 祐司（名桜大学教授）

**閉会挨拶** 16:55-17:00
屋良 健一郎（名桜大学上級准教授）

2024. 7/20（土）
13:30～17:00
沖縄市民会館
中ホール

**参加費無料**
事前申込不要

参加対象者
地域・一般の皆様

■主催：名桜大学大学院国際文化研究科　■共催：名桜大学沖縄ディアスポラ研究センター、名桜大学環太平洋地域文化研究所
■問い合わせ先／名桜大学環太平洋地域文化研究所　〒905-8585 名護市字為又1220番地の1 TEL：0980-51-1107
■後援：名桜大学開学30周年・公立大学法人化15周年記念事業実施本部

## 「眉屋私記」と屋部

比嘉　久（名護博物館特任館長）

1984年3月10日に潮出版社から発刊された『眉屋私記』は、現在の名護市屋部にあった「眉屋（山入端家）」の人びとの生きざまを通して近代沖縄の民衆の歴史を描いた記録文学作品である。著者は炭鉱労働者の暮らしを描いた記録文学作品を多く遺した上野英信氏（1987年没）である。『眉屋私記』の序章「嘉例吉の渡波屋」で鮮明に描かれている「渡波屋」は、屋部の人びとが移民や出稼ぎに旅立つときに見送りの場となった大切な拝所である。2021年、その渡波屋の側に「眉屋私記文学碑」が建立された。『眉屋私記』には屋部の地名、屋号、そしてそこで暮らした人びとの姿が鮮明に描かれており、屋部にとって大切な宝の書物である。

---

## 解説

上原　なつき（名桜大学准教授・名桜大学沖縄ディアスポラ研究センター研究員）

沖縄県出身者のキューバへの初回移民は、1907年にメキシコ経由で渡った大宜味村出身の宮城勝が最初である。1907年はアメリカ合衆国と日本政府との間で非公式な協定が結ばれたため、それ以降、日本からアメリカへ移民することが制限されてしまった。それを受けて、隣国メキシコから陸路で不法にアメリカへの移民を試みた者、諦めてメキシコからペルーやキューバなどへとさらに転移民した者も多くいた。つまり、『眉屋私記』の主人公の一人である山入端萬栄が1916年にメキシコからキューバへと移民したことは取り立てて珍しいことではなかった。当時、「アメリカの裏庭」とも呼ばれたキューバでは、アメリカ企業が大農場を経営し、アメリカ輸出用の農作物が生産されており、沖縄移民の多くが農業に従事していた。そのような状況のなか、サーカス団員やドイツ公使の運転手という萬栄の経歴はキューバ沖縄移民のなかでも特殊な事例であったといえる。

## キューバ沖縄移民による宗教実践の現在－日系人共同墓と慰霊行事の調査報告－

上原　なつき（前掲）

社会主義体制による海外渡航の制限、経済的困窮、インターネット環境の不十分さなどにより、キューバ沖縄県系人が来沖することはおろか、オンラインを介した交流もいまだ困難である。そのため、一世が不在となった現在では沖縄県系人で日本語および沖縄諸語を話せる者はほとんどおらず、沖縄文化や沖縄的宗教実践もほぼ継承されていない。また、結社の制限のため、政府公認の「県人会」が設立できないという特殊事情がある。このような状況において、首都ハバナで沖縄県系人を含む日系人の紐帯となっているのが「キューバ日系人慰霊堂」という共同墓と、毎年11月に開催される慰霊行事である。

---

## 越境するウチナーンチュ－具志川からブラジルへの出移民と多様な移動の経験－

長尾　直洋（名桜大学准教授・名桜大学沖縄ディアスポラ研究センター研究員）

本報告では、沖縄県中部に位置し、県内でも多数の移民・移住者を輩出した具志川地域を対象とした地域史に注目し、特に証言資料を参照することで、統計資料のみでは確認できない、具志川から南米へ移動した人々の、一国・一地域を越えた移動経験や情報の越境性を指摘する。具体的には、第二次世界大戦前後に具志川からブラジルへと渡った移民・移住者43名の証言資料から、日本国内、旧日本帝国勢力圏内、ハワイや中南米などについての直接・間接の移動経験や情報とブラジル渡航との関連性を示す。

---

## ペルー沖縄移民のアルゼンチンとブラジル転住

我那覇　宗孝（名桜大学客員教授・名桜大学沖縄ディアスポラ研究センター研究員）

ペルーは1899年に日本移民を、1906年に沖縄移民を受け入れた最初の国であったが、当時の移民の生活・労働条件はまだ形成途上であり、多くの人々を満足させるものではなかった。1910年、転住の第一の波が起こり、多くの沖縄移民がより良い生活環境を求めてアルゼンチンやブラジルに転住し始めた。その後、ペルーでの沖縄移民の状況は改善され、経済的に豊かな状況になったが、第二次世界大戦によってその状況は断ち切られた。終戦時、ペルーは18年間にわたり、沖縄で留学していた二世の帰国を拒否した。こうして1950年代、転住の第二の波が起こり、3,000人以上の二世が沖縄からボリビア、アルゼンチン、ブラジルに渡り、もう一度家族が再会し、新しい生活を始めた。